

言葉の「闘争」と言葉からの「逃走」

—— 中上健次「十九歳の地図」をめぐって ——

疋田雅昭*
(日本語学・日本文学分野)

要 旨

中上健次「十九歳の地図」を「浪人」「電話」「大学生」などの同時代表象で読み替えるとともに、テキスト全体を「移動」と「アイデンティティ」をめぐる物語として捉え直し、中上の文字的営為の始発点に位置づけようとする試み。

キーワード：中上健次、十九歳の地図、地図、移動、電話

中上健次「十九歳の地図」(『文芸』一九七三年六月)は、以下の様な場面から始まる。

部屋の中は窓も入口の扉もしめきられているのに奇妙に寒くて、このままにしているとぼくの体のなからなまでに凍えてしまう気がした。ぼくはうつぶせになって机の上に置いてある物理のノートに書いた地図に×印をつけた。いま×印をつけた家には庭に貧血ぎみの赤いサルビアの花が植えられており、一度集金にいったとき、その家の女がでてくるのがおそかったので、ぼくは花を真上から踏みつけすりつぶした。(373頁)

多くの小説がそうであるように、この物語のなげない冒頭にも実に多くのことが語られている。「ぼく」(吉岡)の部屋は常に「寒さ」を象徴する空間として描かれている。「サルビアの花」も終わりかける「十月」はそろそろ寒さを感じ始める晩秋である。「ぼく」は住み込みの新聞配達員をしながら予備校に通っている。

この背景には、後年になって新聞奨学生問題として可視化されることになる事態が明確に刻まれており、さらに急速な勢いで社会化・政治化された主体から消費の主体へと変化するようになった大学生の様相が影を落としている。にもかかわらず、こうした時代性が捨象され期待の新人作家の過渡期的佳作ある

* 東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 日本語学・日本文学分野 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

いは習作である様に見られてしまった⁽¹⁾テクストを、小文字の歴史性から読み返してみたいというのが、本論の重要な目論見の一つである。

テクストでは、一人称の「ぼく」と語られる青年が、視点人物であり、唯一内的焦点化される存在である。明確な語りの現在を示す指標がないため事後的な語りというよりは、「ぼく」の独白を現在進行形的に追隨しているような描かれ方をしている。町を疾走する「ぼく」の物語と「ぼく」自身をも含む町を俯瞰的に把握しようとする「ぼく」の物語が折り重なって進んでゆく。

このノートは、予備校での学びという本来の目的には使用されていないが、後述するようにこの地図が「物理」のノートに描かれているのは、小説構造上偶然とは言えない。こうした俯瞰的な世界の中で「ぼく」は「神」にもなりうる存在かもしれないが、一方で町を奔走する時は「犬」として世界を加えている。この「犬」は「サルビアの花」などの植物や小動物に危害を加えることがあっても、人間に直接危害を加えることはしない。というよりは、出来なといった方が的確なのかもしれない。「神」が判断する「×」に相当する実際の「罰」は駆けずり回る「犬」のいたずら電話によって「執行」される。

道をまっすぐいった先に、バラック建てがそのまま古い朽ちたようなつぎはぎした板が白くみえる家で、老婆が頭にかさぶたをつくつたやせた子供をつれてでこぼこの土間にでてきた時も、ぼくは胸がむかつき、古井戸のそばになれなれしく近よった褐色のふとった犬の腹を思いきり蹴ってやった。しかしぼくはバラックの家には×をつけなかった。それが唯一のぼくの施しだと思えばよい。貧乏や、貧乏人などみるのもいやだ。(373頁)

「ぼく」にとつて、配達や集金の現場における現実的な感情で発作的に行われる「罰」より、抽象的な空間把握において与えられる「×」の方が重い。「×」は、別の刑の執行を意味するからである。「ぼく」にとつて、配達や集金などの多くの「現実世界」は、「移動」という行為によってなされる。対して地図という「抽象世界」の作成は、閉じ籠もった部屋の中で同居の人間にも秘密にされた孤独な作業である。地図という抽象(仮想)世界を目の前にした際の感情が「×」の根拠となることもあるが、一方では現実世界の把握時(配達や集金)の

気分によって判断されることも少なくない。いずれにせよ、両者は相互補完的に「ぼく」の世界を形作っていると見える。今ならばネット空間にいる自身と現実生活の自分との対峙といった図式になるのだろうが、一九七三年時の「ぼく」のノートの世界は、一見、閉鎖的かつ自閉的なそれにかみえない。

だが、山田夏樹の指摘⁽²⁾の様に、現在のネットシステムが電話のネットワークを基に発達してきた歴史を鑑みれば、「十九歳の地図」という物語における、現実空間と仮想空間が電話というシステムによって媒介されていることは、本論においても重要な問題となる。

本論では、作家論的ビルディングストーリー、あるいはテクストの時代性とテクストの構造に引き裂かれた先行論の状況に対して、場の構造、人物設定の構造、計算された表象の数々を能う限り詳細に検討し、時代と関連づけて考えてみたいと思う。

1 危ういバランス

十月の終りだというのにめちゃくちゃだと思った。季節も部屋もそしてこのぼくも、あぶなつかしいところにおいてバランスをとりそこねているサーカスの綱渡り芸人のようにふらふらし、綱がぶつとりと断ち切れて、いまにも眩暈を感じながらとりかえしのつかないところにおちてしまいそうな状態だった。(傍線は引用者、以下同様)(373頁)

確かに、配達や集金という現実の世界は、ノートの中の世界という抽象的な世界との「バランス」によってなり立っている。だが、「バランス」「幻惑」「綱わたり」といった語は、物語における「ぼく」の位置をより明瞭かつ広義に語っている。極端に寒い日と小春日和が混じり合う晩秋の日々。大学生活における享楽の日々にも学生運動に打ち込む日々にも「目標」を見出し得ない予備校生という「ぼく」に対し、新聞奨学生という過酷な労働の日々の中で、大学進学という目標に何の疑問も抱くことのない隣人たち。性的な欲望の満たされない日々をおくる「僕」と女を「たぶらかす」日々をおくる謎の同居人。テクストは、多くの危うい「バランス」で満ちている。

「それでいつも電話するんだよ、ああ救ってください、このままでとぼくは自分で自分を殺してしまいます、ああ、ぼくを引きあげてください、このままでとぼくは死のほうへずるずるおちていきます、彼女はぼくのほんとうのマリアさまだ、キリスト教のマリアがうぶ毛が金色にひかる金むくなら、ぼくのマリアさまは、元の皮膚がわからないほどじくじく膿がでるできものやかさぶただけのマリアさまだ。この世界にあの人がいて、まだ苦しんでいる、そのことだけでぼくは死のほうへ、にんがし、にさんがるく、のほうへすべりおちるのをくいとめているんだ」

(374頁)

紺野が語る「マリア」像は、紺野を「死」のほうへ「すべりおちる」のを「くいとめる」存在である。「とりかえしのつかないところにおちてしまいそうな状態」である「ぼく」と、「死」に「すべりおちる」のが「くいとめ」られているという紺野は、一見正反対に見えながらも、ある意味同じ様な状態の二人が同居していることにもなる。両者とも危うい「バランス」上の存在なのである。

同居人である紺野が語る「マリア」は、その実在も含め終始謎の存在である。周囲の「たぶらかす」「だます」という言葉に対し、のらりくらりと肯定とも否定とも分りかねる態度をとる。しかし、周囲の紺野に対する関心はこの女の存在に集中している。

独りの空間を切望する「ぼく」にとって紺野の存在は、それだけで邪魔な存在であることは間違いない。だが、「未成年」「金」「地位」「女」といった満たされない欲望がつきまとう「ぼく」にとって、裕福な家庭という出自、大卒や会社勤めの経験、金をだまし取る女の存在といった、三十過ぎの紺野という同居人の存在は、たとえそれらが信頼性に欠ける「噂」であったとしても、日々「ぼく」を抑圧する原因になっている。

たとえば、以下の様な「ぼく」の独白は、紺野による「ぼく」への抑圧の中で最も重いものが、「性」であることをよく示している。

絶望だ、ぜつぼうだ、希望など、この生活の中にはひとかけらもない、ぼくは紺野の笑いをまねしてグスッと鼻に抜ける声をたてた。ぼくは壁にま

るめたふとんに背をもたせかけて坐り、手を思いつきりにあげて欠伸をした。腹がくちくなり眼がとろんとなるほどぼくを十分に満足させるものはなにひとつない。快楽の時間だつてそうだ。いつもだれかにみられ嘲笑われているように感じるし、不意に扉がひらかれて人がはいりこんできそうな感じになる。このぼくに自分だけのおいのしみこんだ草の葉や茎や藁屑の巢のようなものはない。ない、ない、なんにもない。金もないし、立派な精神もない、あるのはたつたひとつぬめぬめした精液を放出するこの性器だけだ。

(375頁)

繰り返し紺野の「まね」をしてみる「ぼく」にとって、紺野は単なる拒絶の存在ではない。むしろ、拒絶しきれない「抑圧」こそが紺野そのものであり、その「抑圧」の根拠は自己投影である。客観視された自らの姿を「性器」と捉えるこの場面には、他者を己の「影の投影」(C・G・ユング)の様に認識しそこに忌避の対象を見出そうとする「ぼく」の思考法とともに、「性」に強くとらわれている「ぼく」の姿が刻まれている。

不意に涙声になり、犬の遠吠えのようなすすり泣きの声がかくひびく。障子の壊れる音がし、獣が威嚇するときたてる唸り声のような男の意味のはつきりしない太く低い声がきこえる。女の泣き声は奇妙にエロチックだった。もしぼくが子供のときこのような争いがあり、母親がすすり泣きをはじめたとしたら、きつと不安でたまらずなにかもめちやくちやに破壊してやりたいという衝動にとらわれ、うずいただろうが、十九歳の大人の体をもつぼくは、それを煽情的なものと思って、きまつて自慰し、放出した精液で下着をくたくたにした。

(375頁)

喧嘩によってすすり泣く女(母親)やその息子を「犬」に喩え、前者をエロチックな対象、後者を憐憫すべきロマンチックな対象としてとらえようとする「ぼく」の妄想は、どちらにせよ圧倒的な力を持つ支配者あるいは無関係な他者の「余裕」の様な感情に裏打ちされている。こうした支配者としての全能観は実生活の抑圧感の反転であるが、「支配」「被支配」と「性」の両者を結びつ

ける媒介としての「会話」や「電話」の存在は、この物語がノート（非現実）と生活（現実）との単純な二項対立ではないことを考える上で非常に重要なアイテムである。

となりの部屋にいる斎藤は紺野のことを、先天的なうそつきで、自分でだっぴいっぴいなにやってきたか、いまなにをやっているのかわからないのではないかと、と言った。
(382頁)

長く寮にいる隣室の斎藤の言葉は、凡庸ではあるが的確である。「ぼく」にとつての周囲の人物理解の多くは、斎藤のそれであると言つてよい。「ぼく」にとつて斎藤の話は「落語のようでおもしろい」のだ。だが、そんな斎藤の言葉も、こと紺野に関する限り、「ぼく」に届くことはない。

「まだあいつはましき」斎藤がそう言つても、紺野と同じ部屋にいるぼくは、口からでまかせのいいかげんなことをきかされるのにうんざりし、時折めちやめちやに殴りつけてやりたいと思うことがあつた。だいたい紺野はぼくをなめていた。ただひたすら大学に入るために勉強している、なにひとつ分別のつかないなにひとつ知らない子供だというふうにはぼくをみているのが気にいらなかった。ぼくは大学などどつくにあきらめている。
(382頁)

大学進学という目的をあきらめている新聞奨学生。「ぼく」の閉塞感は、紺野への反発だけではなく、容易に斎藤にも飛び火する。

斎藤に言わせればこの男は、人生の敗残者らしいが、さてその人生というやつはいったいななんだ？ 人生なんて東大を出て高級官僚になろうと乞食になってガード下で坐ろうとさして差があるわけじゃない。むしろ世間というやつだろう。ああ、やつてくれ、おおいにやつてくれ、この男のように世間の敗残者にならないように勉強して東大へでも一ツ橋にでも入ってくれ、テントリ虫、芋虫、うじ虫、斎藤の糞野郎。
(395頁)

斎藤は典型的な新聞奨学生（受験生）なのである。ここで問題にされている「世間」が、いわゆる学歴社会的な価値観を示していることは容易に想定できるだろう。

刈谷剛彦の指摘⁶⁾では、戦後直後の日本においてはブルジョア的な階層再生産という問題が、文化面とは異なる形で存在していたにもかかわらず、「学歴神話」そのものがそれを見えなくしてしまったという。

誰もが「公平」な方法で選抜されることを保証する大衆化したメリトクラシーだからこそ、選抜結果をだれもが正当なものとして受け入れなければならなくなる。教育を通じたメリトクラシーの大衆化を推し進めることで、社会が行なう選抜の正当性を確保しようとする社会——教育の大衆化が、メリトクラシーの大衆化をも引き起こすことになったのは、いかなる事情によるのか。

メリトクラシー（試験の成績をメリット＝業績と考える）は、機会の平等の「感覚」と表裏一体である。実際は、成績と出自は無関係ではないのにもかかわらず、機会が平等であると言う思い込みが、いやそう思うからこそ、そこに至る「努力」が称揚され、成功は「努力」の結果であると受け取られるようになる。このパラドクスの状況を信じ込ませるのが、まさに「神話」作用であるという指摘なのだが、この物語の背景には、こうした「神話」が強い影響力をもつて横たわっている。

文科省の「学校基本調査」のデータを基にした大学進学率⁷⁾では、専門学校が出来た一九七六年以降に一端下降するものの、バブル期以降暫時増加し一九九九年には五〇%にとどく。

こうした背景には、大学進学やそれがもたらす将来のメリット（就職）があつたことは間違いない。物語では、このメリットが、自らの「努力」によって大学に進学することから得られる「貧乏」からの「脱出」として表象されている。

昨今ようやく可視化されるようになった「ブラックバイト」の中で、最も長

い歴史を有するとともに、常にそれを代表する表象として描かれてきたものが「新聞配達」である。

新聞配達と苦学生という表象が結びつきやすいのは、その歴史の古さにもある。一九六〇年代後半から各新聞社が制度化していった「新聞奨学生制度」だが、それが社会問題化するには、平成二（一九九〇）年十二月の「読売新聞奨学生過労死事件」を待たねばならなかった。以後、この問題は繰り返し取り沙汰されているが、その労働環境が根本的に改善されているとは言い難く、本来こうした出来事を事件化して報道すべき機関である「新聞」の販売システムの問題が根底にあることが、この問題をさらに難しくしている側面がある。

「新聞奨学生 SOS ネットワーク」では、現状での諸事件・諸問題を随時ネットで配信しているが、「起床時間」「拘束時間」「集金」率の強制、劣悪な「生活環境」など、物語で描かれる労働上の問題は、依然として存在している。

制度としては、各新聞社の子会社や販売店組合が主催する奨学会が学生を募集し、新聞販売店に労働力として斡旋する形をとる。現在の奨学会は職業安定法における職業紹介事業者、もしくは委託募集における募集受託者にあたり、販売店は奨学会へ代金を支払う形をとるが、当時の経営者は社会福祉的事業者であった様な印象もあり、それが劣悪な労働環境を不可視にしていた面も否めない。「けちなくせに義理人情にあつくふとっばらである」とほくらにみられたがっている」と評され、労働者の誰からも認められていない店主の像には、こ

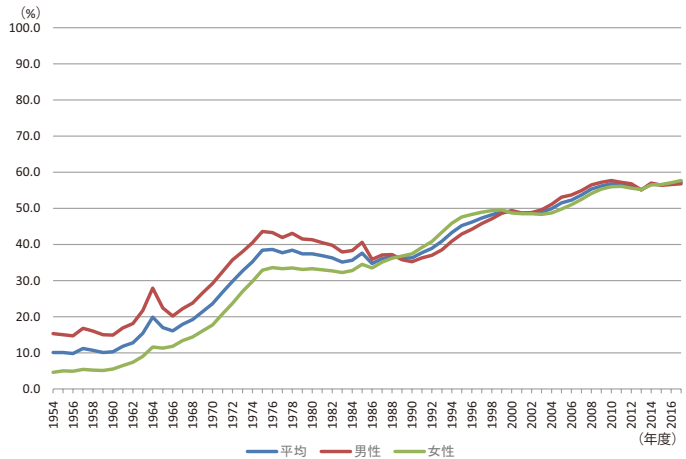


図 大学・短期大学への進学率 (過年度高卒者などを含む)

うした同時代的なイメージが刻印されていると言える。

(起床ブザーの音に対して―引用者註) 紺野はそのたびに、小声で文句を言った。「あの音をきいてるとなんだかわからないけどわが身がうらがなしくなってくるんだな」

「そこまであいつは気がまわらないよ、二十人ほどの人間がいるのに、お茶をのむコップ五つしかないんだから」

「あいてにしないほうがいいさ。まだあのくそつたればババアのほうがいいなしをしてもわかるよ。でも、おれが月賦でセーターとズボン買うからとたのんだら、よしたほうがいい、現金で買ったほうがいいって言いやがった」 (391頁)

勤務態度や思想学生の排除などに注意しながらも、労働者たちの待遇改善には全く気を回すことが出来ない店主も、「ぼく」から見れば、「世間」側の人間である。だが、店主のような人間をブルジョアの権化とみたてて闘争することも、ノンポリとしての後の消費の主体となる新しい学生の世代のはしりになることも、大学生という出口を失っている「ぼく」にとってはあり得ない選択肢であった。

そして神の啓示のようにとつぜん、二十歳までなにごとややる、そうして死ぬ、と思った。それはぼくにとって重大な発見だった。なんとかその年齢まで生きてやろう、しかしその後は知らない。 (401頁)

こうした出口のなさを「ぼく」の「主体性」の欠如に起因させる読みは可能であったろうし、事実同時代評にはそうした読み方も存在する。だが、「ぼく」のあり方には、そうした個人的な事情を超えた時代性を読み込むべきなのではないか。もちろん、それは「ぼく」を時代の典型としてとらえようという意味ではない。このテキストを読むこと自体が、「ぼく」や「紺野」と同様に危ない「バランス」の上に存在するのである。

2 テクストの時代性

朝、この街を、非情で邪悪なものがかけまわる。この街にすむ善人はそんなことも知らず、骨も肉もとろけるほど甘い眠りをむさぼっている。(中略) 犬の精神、それはまともに相手にしてもよい十分な資格をもっている気がした。この街を、犬の精神がかけめぐる。(380頁)

朝、町を駆け巡る自身を「犬」もしくは「犬の精神」と捕らえる「ぼく」にはある種の二重性が見られる。「犬」を卑下すべき対象あるいは暴力の絶対的被害者と位置づけておきながら、一方では人知れず世間に反抗し続けるものの象徴としてもいるからだ。

「犬」とは、「邪悪なもの」であると同時に、「人」がまだ寝静まっている朝の町を駆け回る象徴である。また、後に同じ様にガラスに映る自己を「獣」ととらえているところから、暴力性や凶暴な気分を掻き立てる一面がある一方で、自己卑下に繋がる場所からは同族嫌悪に近い感情の源泉となっていることも伺える。

けだるいまま精液のぬめりの残っている性器をしまいこみ、ジッパアをひきあげて立ちあがり、ぼくは地図帖のサルビアの花のある家に×印をもうひとつつけた。この地区「ぼくの支配下にある。これでもうこの家は実際の刑罰をうけることになった。爆破されようが、一家全員惨殺されようが、その責任は執行人のぼくにあるのではなくこの家の住人にあるのだ。(376頁)

ノートの地図を目の前にする「ぼく」は、町全体を俯瞰的な視点でみつめる「支配」者である。その支配の力は「×」を与えることにより執行されるが、外の世界に出た「ぼく」にとつての罰の執行は「電話」という手段によってなされる。だが、なぜ「支配者」であるはずの「ぼく」に「罰」の責任はない、と言えるのだろうか。それは、書かれている場所すなわち「物理」のノートと関係があることが、後に明らかになるだろう。

女が受話器をとったとき、ぼくは女の声の応答をまたず、「きさまのここは三重×だからな、覚悟しろ」と押殺した声で言った。「なにをされても文句などいえないのだからな、犬のようにたたき殺されて皮を剥がされても、泣き言はいいな」ぼくは女の声を無視してそれだけ言う受話器を放りすてるようにおいた。(377頁)

無言電話から徐々に感情を高めて脅迫に至った途端に相手の方が「犬」になつているところに先に指摘した二重性が見られる。「犬」は加害者でもあり被害者でもあるような、主客を容易に逆転する存在として描かれているのだが、「ぼく」はその後、「電話の効果」を見届けることを途中で断念してしまふ。

ひとりで興奮して喜んだつて、ほんとうはなんにも変りゃあしない。畳屋は畳をつくつていりし、肉屋は皮を剥いだ太股からすこしでもよけいに肉をそぎとろうと包丁をもってためつすがめつやっている。なんにも変りゃあしない。ぼくは不快だった。この唯一者のぼくがどうあがいたつて、なにをやつたつて、新聞配達少年という社会的身分であり、それによつてこのぼくが決定されていることが、たまたまなかった。(377頁)

「ぼく」の衝動的な「罰」の執行は、すぐさま、自己の無能さの再確認に反転する。自身の無能感の多くは「予備校生」という身分に由来するものであるが、「四年間遊び呆ける」とことと「ゼンガクレン」に象徴される学生運動の二択のいずれをもよしとせず、さらにはその後の「サラリーマン」という未来にも希望を感じていない「ぼく」にとつて、「予備校生」という無能感は期間限定のそれではなく、出口のないそれである。

学生運動がピークに達した一九六八年、全学連から見た下部組織のあり方について中島勇三は、以下の様に語る。⁸⁾

しかし「予備軍の主体は二年生で、三年になると受験勉強にいそがしく、運動か勉強かとなると、やっぱり勉強をとる者が多い、そこに限界が

ある「(反戦高協リーダー)が、彼らの最終目標は大学にはいつて学生運動をやること。そのためには絶対大学にはいらねばならないといいきるものさえている。

浪人生や高校生にまで普及した学生運動は、旧制中学以来の伝統的進学校や国立大学教育学部附属高校を中心にピーク時には三五都道府県一七六校にまで及び、一九六九年には全国浪人共闘会議(浪協闘)が結成されている。こうした団体に最も期待されたのが、将来の有望な「細胞」(学生運動の担い手)の育成である。こうした団体の運動にも、「予備軍」と目されるだけあって、制服自由化や教育課程やその方法の改善要求など「左翼」的な要素をもつものが多かったが、こうした運動形態に対抗する形で、民族派系の全国学協、日本学生同盟、日本学生会議や、創価学会系の新学生同盟などの、左翼系でない(実態として必ずしも「右翼」かどうかは別としてイメージとしての)「右翼」系学生団体も出現した。

民族派系の運動は、三島由紀夫の自殺(一九七〇年)や、既成の左翼を批判する新左翼運動と呼応しいわゆる左翼言説のカウンターとして勢力を伸ばした面があり、その影響力は批判対象の喪失とともに低下したが、その後の左翼運動存続のためには暴力から離れてゆく必要があったのとは対照的に、右翼運動は、少なくともそのイメージにおいて「暴力」から乖離する必要はなかった点は重要である。

受話器のむこうで男の声があつた、と口ごもり、話をつづけたそうなおやうすだった。ぼくは無視して電話を切った。あいつは今夜眠ることもできずにあれこれ考え悩むにちがいない。ぼくは上機嫌になった。ぼくは声を出して笑った。そうなんだよ、あんまり有頂天になって生きてもらっては困るのだよ、世間にはおまえたちが忘れてしまったものがいっぱいあつて、いつでもおまえたちの寝首をかこうとしているのだからな。大通りを駅のほうにむかつて歩きながらぼくはまるで恋人の名前をいうように、おれは右翼だ、と試みてみた。けっしてわるい感じではない。(387頁)

「ぼく」にとって「右翼」という「アイデンティティ」の発見は、「世間」に安住しているものたちの「寝首をかく」という意味で非常にふさわしいものかと思えた。

周知の様に、一九七〇年に入り、沖縄返還の実現によって日本人の反米感情が薄れ、学生運動は急激に衰退していった。その背景には、横行する内ゲバや暴力闘争の激化などによってシンパシーを失っていったことが大きく影響している。新聞配達員のポーンナス支給運動の組織が解体に追い込まれたり、店主が左翼的思想を常に監視したり、浪人生たちが「ゼンガクレン」の人間を軽視したりする様子は、まさにこうした時代性を反映していると言える。

初出時の一九七六年と寮の壁の「シシリアン」(上映は一九六九年、日本は翌年)のポスターから、物語内容の時間は一九七〇年代前半と規定できるが、それはこうした学生運動の主体が「左翼の国士」から「消費の主体」へと大きく変貌をとげる過渡期であった。

3 「紺野」という存在

「新聞」とは「世間」に「情報」を配信する媒体である。だが、目的を失っている「ぼく」は教科書や参考書が与えてくれる「情報」を必要とはせず、社会的な「情報」にも無関心である。「ぼく」は「情報」を配ってはいないが自らは記述言語的エクリチュールな「情報」を必要とはしていない。その意味で彼が得る情報は、会話的パロールなそれだけである。

だから部屋の中に散らかった新聞紙は紺野の読んだものだ。紺野は新聞を讀みながら涙をながしたりした。子供が野原にすてられ腹をすかして泣いているのを発見されたという記事などあるともういけない。紺野はおお、おおと関西なまりの声を出して涙ぐむ。(381頁)

紺野は、新聞を読み、その記事で涙ぐむ。紺野という存在は、一見あらゆる面で「ぼく」の反対であるかのように見える。だが、紺野が新聞から得ているのは事件の概要という「情報」ではない。新聞という活字から得た「情報」を

「物語」として受け取っているのだ。それが、紺野の場合は、「涙」という形で現れる。

「なにをみてきたというんだよ、なにをみたというんだよ」

「おれはさ、貧乏人をほんとうに嫌いなんだ、あいつらはあんな声しか出さないんだ、あんな声出して夫婦喧嘩して、あんな声出して性交して、あんな声出して子供をうむんだ。いやだねえ、ちよつときいてやってくれよ。はずかしげもなしに近所中にきこえる声出してよ、あいつらに情なんぞいらぬさ、マシンガンでもぶっぱなしてやればいいんだ」ぼくは声に出して笑った。

(384頁)

紺野はとなりの喧嘩に強く同情（読解）することで、自分より不幸である人間がいるという嘆きに「解釈」し、自分を最も不幸な存在にすることを「理想」とする。

こうした紺野に対して、貧乏人には決して同情的な態度を示そうとはしない「ぼく」は、一見正反対に見えながらも、「情報」の「解釈（読解）」の仕方（同情の発露）が異なるだけで、貧乏人に独自の感情を抱いている点では共通している。

紺野の見せる写真、マリアの存在、これまでの来歴、どれをとっても紺野という存在は理解不能なそれである。だが、「ぼく」は何故、それらを斉藤たちのように「虚言癖」であると言いつつことが出来ないのだろうか。

ぼくはいまどうにもならない絶望的な場所にいる気がした。ほんとうになにをみたというのだろうか。いったいなんのためにこんなところにいるのぞみくずのつまった部屋にうじ虫のようにいるのだろうか。

(385頁)

恐らく同部屋である「ぼく」が、主たる紺野の会話の相手であること、それが女をめぐる物語であること、そして何よりもその物語に何かしらの合理的な「解釈」を与えられないことが「ぼく」を追い詰めている。「紺野」も「ぼく」も本質的には会話的人間なのである。

のうのとこんなところで生きてるやつらをおれはゆるしはしない。ボックスの硝子にむかって口唇だけで声を出さずに言ってみ、ぼくはにやっと愛嬌たっぷりなえみをつくり、そしてもう一度ジャンパアのポケットから十円玉をつかみだし、穴の中に入れ、ツーという音をたしかめてダイアルをまわした。二回呼出し音がなり、若い男の声がひびいた。その男のあかるい声につられてぼくは自分の言うべきセリフを忘れてどぎまぎし、「あのう」とふがない声を出してしまった。もういけない。

(386頁)

「ぼく」は、電話の最中に声の主が男に代わるという状況が苦手である。背後に男を感じる女が得意ではないと言った方がいいか。「ぼく」がこういう状態になると冷静さを欠いてしまうことは、その背後に「性」への欠乏感や劣等感があることと無関係ではないだろう。だが、ここで注目しておくべきなのは、そうした結果導き出される「敗北」が、電話の場合、自分の言葉（台詞）に相手を引きずり込めなかったという現れ方をすることだ。

さらに重要な点は、実はこの「敗北」の認識は、紺野との会話においても、しばしば現れる。紺野の見せる写真やマリアの話に対して何も論駁出来なかった「ぼく」は、近くにあった日本史の教科書の記述に逃げ込もうとする。

誰が権力をにぎり、なにがつけられようとおれの知ったことか。日本史、なんのためにこんなものを理解したり記憶したりしなければいけないのか、さっぱりわからない。この教科書の記述とはほどとおいところでおれの先祖は生きてきただろうし、いま現在、おれはそれらの記述のおよばないところで生きている。日本史を読むおれは逆説だ、いやこのおれそのものが逆説だ、いやちがう、このおれはまっとうだ、まっとうでなくさかだちしているのは過去がつづいていまにいたっているのだと思っっているこの教科書をつくった人間だ。

(385頁)

受験勉強のための「日本史」という物語への想像力が、逆説的に「ぼく」を追い詰める。決して社会的、政治的な表舞台に立つことのない自身を過去に投

射し、先祖からの血脈的な運命として再認識することによって、自己の卑小感を際立たせる。むろん、この紺野によってもたらされた卑小感は、世間への憎悪へ容易に反転する。

ぼくは日本史の教科書を投げすてるように本立にしまい、かわりに地図帖をとりだしてひろげた。十津川仁右衛門という名前が眼についた。その家は無印だった。となりの川口という家の二倍ほどの大きさで家をしめす長方形が描かれてあった。その家の人間にぼくは恨みはなかった。しかしぼくはボールペンで三重×をつけた。

(389頁)

歴史という垂直的かつ「実証(現実)的」な想像力が顛倒し、地図という水平的かつ「妄想的」想像力へと至る。このノートの「物理」という受験の科目名は、少なくとも紺野の会話を遮断する「機能」を果たしているようだ。

だが、この想像力の転換は、「受験生」という受動的な無能観から「神」という能動的な絶対観への変換でもあった。そして「神」の「×」は、「犬」となった「ぼく」の「罰」として執行される。それは、暴力的な言葉の支配といったらいいだろうか。だが、勝てたととしても、すぐに劣等感に反転してしまふこと以上の問題なのは、それが必ずしも勝てる闘いではないことだ。

「言うべきセリフ」を失ってしまった十津川仁右衛門には敗北してしまっただが、続く高山梨一郎への電話では、「右翼」という言葉を手にすることにより、自ら一方的に電話を切ることが出来た。

ぼくは高山梨一郎にむかってどなるようにしゃべっているぼくを想像し、不意に歌のような文句がでてきた。おれは犬だ、隙あらばおまえたちの弱い脇腹をくいやぶってやろうと思っっているけものだ。

(388頁)

ここでも自らを「脇腹」を食い破る「犬」とみなす「ぼく」の高山に対する勝利の感情は、相手の平穏な日々の中に得も言われぬ不安の感情をかき立てることが出来たという思い込みから生じたものであるが、この勝利のためには、いたずらだと見抜かれ論理的な反論によって相手に言いくるめられる前に、一

方的に電話を切ることが必要だったのである。

「たぶらかしてなんかいないぞ、ぼくたぶらかすなんていうことは絶対やれないし、やったことないんだから。いいか、どんな女だってどんな人間だって大丈夫なことないんだから。いいか、どんな女だってできやしないんだよ。おれは金持だと言うだろう、いや女にむかつてぼくは君を愛していると言うだろう。相手に心底思いをこめて言わなければ、相手に通じるもんか」紺野はぼくの言葉に刺激されて言いつのつた。紺野が不意に感じた腹だちのようなものがおかしかった。

(392頁)

こう考えると、紺野が感じた「腹立ち」を「ぼく」がおかしかった」と感じる理由も、その後に紺野を論駁仕切れない齋藤の「いらだち」も容易に理解出来る。たぶらかされていると分かっている女をたぶらかすことは出来ない。紺野の言を会話で論駁するのは、困難なのだ。

その日の午後、「ぼく」は地図づくりに熱中する。

ぼくはそんなあわれにつつましく一人で生きている人間にはまったく興味がない。ぼくは高山梨一郎とか十津川仁右衛門とか平田純一とか、おっこちないでうまいぐあいにこの社会の機構にのっかって生きている人間のことを知りたいのだった。

(393頁)

「あわれ」とか「つつまし」い生き方には興味ない。それは、社会の機構(世間)から既に落ちたものたちだからだ。この「おっこちない」という比喻は、「ぼく」や「紺野」あるいは、この物語全体のモチーフと共鳴している。

光がとなりのアパートの窓硝子に反射していた。ぼくは物理のノートをとじた。そうだ、ものの法則だ。力を加えると石は逆方向に動くこととする。ぼくは物理のあやふやにおぼえた法則を思いだし、このぼく自身がその参考書に絵入りでのっていた石のようにいまここにいて考えていると思っただ。ぼくに希望などない、絶対がない。

(394頁)

物理の参考書に載っていた「作用」「反作用」の法則を自らの姿に当てはめているこの場面は、地図の世界と現実の世界の関係を雄弁に語っている。地図という静止した記号の世界は、奔走する労働や紺野の言葉によってもたらされる現実の「反作用」である。

予備校にいつて勉強して大学にはいつてそれでどうするというのがだ。(中略)ぼくは椅子から立ちあがり、俳優のように背をまるめ、上目づかいに窓の外をみて、「おれは右翼だ」と言ってみた。しかしどこか嘘のような気がした。「おれはおまえを生かしちゃおかない、おまえなんぞ死んでしまえ、おまえはきたらしい」ぼくは声に出して言ってみた。(394頁)

繰り返される電話ボックスに映る自己の姿は、「犬」になったり「右翼」になったりしながら、「ぼく」のアイデンティティに揺らぎを与える。電話での暴言は、地図の世界における「×」の「作用」であり、ガラスに映る自己像は、いたずら電話という行為からもたらされる「反作用」なのである。

4 言葉の闘争／逃走

この物語内時間は、およそ三ないしは四日間であるが、ここでは、現実世界と抽象世界の間の往復、果てしない「作用」「反作用」が繰り返される。その円環は、これまでも続いて来たであろうし、これからも続いてゆくのだろう。

ジャンパアをはおり、ぼくは物理のノートを本立の中にしまいこみ、ポケットに小銭があるかどうか確認して部屋を出た。廊下のつきあたりの水洗便所はまだなおしてないらしく水が滝のような音をたてて流れていた。それがいまいましかった。

(394頁)

繰り返される修理されない「水洗便所」の描写において出発する「おれ」の感情は「いまいまい」と表出される。部屋の外にある共同便所は、抽象空間と現実空間の境界であり、止まらない水の音は両者にわたる果てしない円環運

動を示しているようだ。

午後の光を顔に直接感じながら、ぼくは汗でしつけた十円玉を入れ、ダイヤルをまわした。(中略)「待てないんだ、おれは忙しいんだからな、ここからちやうどおまえの顔がみえるからな、いそいで教えてやろう、めっちゃくちゃになるんだよ、あの玄海が十二時きっかりにふつとぶんだよ」「爆破すると言うのですか?」「いや、そんなこと知らない」「爆弾をしかけたと言うのですか?」「さあ、どうかな?」「いま車庫に入ってますよ、冗談でしょう?」「ばかやろう! 冗談かどうかみていろ、ふつとばしてやるからな、血だらけにしてやるからな、なにもかもめっちゃくちゃにしてやるからな」ぼくは受話器を放りなげるようにしておいた。玄海号は今日の午後八時に東京駅を発車する。午前四時頃にO駅につき、五時頃にK市につき、六時すぎにSにつく。ぼくは顔に直接あたっている光のほうにむかってあかんべえをひとつやり、声に出して笑った。ばかやろう、とんま、うすらばか、はくち。

(394頁)

この列車に相当すると思われる「げんかい」は、昭和二六(一九五二)年の当初は大阪から博多の区間を臨時急行として運転されていたものが、翌年の二七年に定期運行となり「げんかい」と命名。初出時の昭和五一(一九七六)年の時点では、東京にまで延長されていたのだが、昭和五六(一九八一)年一月のダイヤ改正で再び京都から大阪間となり「玄海」と漢字表記となる。^⑩「O」が「小郡(現在の新山口)」だとすると「S」が「下関」だろうか。いずれにせよ、「玄海」と漢字表記される路線は、物語内時間には存在していない。

その意味でこの設定は作家論的な問題に収斂してゆくことはないが、少なくとも、「ぼく」の年齢から考えてこの鉄道が出身地と繋がりがあろう(何度も利用している路線である)ことは否めない。普通ならば終点の「博多」を考へるべきところを山口周辺の駅とその時間を記憶しているところが、この想定を補完する。

実は、当時「学生運動」と「爆破」という連想は、決して珍しいものではなかった。^⑪一九七四年におきた「東アジア反日武装戦線」の連続爆破事件の主要

メンバーが逮捕されたのは、七五年五月であり、七六年三月の北海道庁爆破事件の主犯と目される大森勝久は岐阜大の出身の活動家であった。

むろんこれら「左翼」的運動は「ぼく」のポリシーとは相容れないものであったが、「右翼」と名乗ったところで学生活動家から一般にイメージされることは同様だったに違いない。高山梨一郎の出身地である「岐阜」に対して「右翼」の学生であると名乗ることは、いずれの意味でも「恐怖」を与えるには十分であったに違いない。

紺野の言葉の「反作用」から生み出された「罰」は、玄海号の「爆破予告」という言葉を東京駅の駅員に一方的につきつけることよってなされた。もちろん、一時的には勝ったように見える一方的なやりとりは、すぐに自己の存在の再確認へと「反作用」する。

ぼくは外に出た。そして光に全身をとらえられたまま立っていた。買物籠をさげた女が二人ぼくの脇をはなしこみながらとおりすぎた。ぼくの体の中になにかが破けて血液のようにどろどろしたもののが外に流れだす気がし、午後の光をうけたせいしかほてった額に手をあて汗をぬぐうようにこすった。ばかやろう、とんま、うすらばか、はくち。その言葉のリズムが、不快だった。(395頁)

同じ「ばかやろう、とんま、うすらばか、はくち。」という言葉が、電話ボックスでは笑いとともにあつたにも関わらず、一歩外に出た途端に「不快」なものに反転しているのだ。さらに、帰宅した部屋で「夢も希望もなしにこいつはよく生きていけるな」と笑われる「紺野」は、実は「ぼく」の姿でもある。「影」でもある紺野は「ぼく」自身なのである。

次はスナック《ナイジェリア》、ここは女が気に入らなかつた。ずうずう弁の女は、まるで新聞配達のは自分の下僕であるというふう、「だみじゃないの、いつも教えているでしょ、入口じゃなく、裏までまわって入れてちょうだい」とこのあいだもぼくの顔を見ると言った。「だみですか」ぼくはその女のなまりをまねして言ってやった。ぼくはスナック《ナイ

ジェリア》と書いた入口のドアに、ちょうど女が朝おきだしてドアをあけると犬に餌を与えるように頭の上から新聞がボタンと音させるぐあい計算して、ひっかけた。あの女はそれにはがまんできない。ここはこれで×印が三つ。通りを走って路地に入ると他の新聞社の配達に出あった。すれちがいがまに男は「おっす」と声をかけた。ぼくは反射的に「めつす」と答えた。(399頁)

配達中にはいかに効率よく動けるかが全てである。ひたすら「疾走」する時間であり、リズムよく動くためだけに身体をコントロールしている時間である。だが、こうした時間は、これまでの様々なアイデンティティをめぐる苦しみから解放される時でもあるのだ。ここでの「闘争」は、そうしたリズムを壊そうとするものだけにむけられる。

ぼくは雨合羽の帽子をはずして右側の雨水のたまっているポケットにつっこみ、いまはじまった朝の凍えた空気と自分の体のぬくもりが完全にすりあう黄金比のところにもついでいこうと、鼻で息をととのえながら走った。鼻腔が空気をすうたびにためたく、ぼくは自分が健康な犬のように思えた。高山梨一郎の家の郵便受けのささくれはまだなおっていないなかつた。(401頁)

「黄金比」という比喩は、能う限り身体を客観視しようとする「ぼく」の理想をよく示している。「犬」にとって自らの身体をコントロールし配達の効率をあげることが「健康」につながる。だが、その「健康」は走り続けることではなく維持出来ない。「犬」である自覚は容易に自己否定に反転するからだ。

あらたに三重の×印の家を三つ、二重×を四つぼくはつくった。刑の執行をおえた家には斜線をひいて区別した。物理の法則にのっとってぼくの地図は書きかわえられ、書きなおされ消された。ぼくは広大なとてつもなく獐猛でしかもやさしい精神そのものとして物理のノートにむかいあった。ぼくは完全な精神、ぼくはつくりあげて破壊する者、ぼくは神だった。世

界はぼくの手の中であつた。

(402頁)

地図の世界にいる「ぼく」を単なる妄想の中にと断罪するのはたやすい。だが、実はそれは本来の世界のコピーが地図であるという思い込みに基づいた判断だ。

若林幹夫によれば、地図とは現実から創られたものであるというよりは、地図こそが、抽象概念を現実化させているという。そもそも、地図を見ることに代表される様な経験（国境線や巨大な空間が何処までもフラットな状態であること等）を我々は現実として、経験出来ない。

このことが意味をするのは、地図という表現は、それが作られた社会における「真実」や「事実」を、その社会における他の言説や情報との相互関係のなかで生み出すのだ、ということである。この意味で地図は、ある社会における事実を表象しており、そのように表象された事実を社会は模倣している。

これは、同時に「事実」そのものが時代と地域によって生み出される概念に過ぎず、その反映に見える地図は、限定された概念を「事実」の様に我々に表象して来ることを意味している。

さらに、そうした地図を生み出す想像力は大きく二段階存在し、若林はそれを「局所的空間」と「全域的空間」と呼ぶ。前者は土地に埋没している自身自身の知覚体験から来る理解、後者は自分自身をも含めたそれを抽象化した理解と言えればいいだろうか。

浅田彰の「カルトグラフィック」^[1]や渡邊大輔の「没入対象」^[2]など、「地図」についての言及は多様になされている。いずれにせよ、中上にとつての地図という作家論的問題に繋がるわけだが、ここではテキスト内に限定した上で若林論に依拠して考えると、「ぼく」の地図は、自己を相対化しながらも自己の価値観によって生み出されているような両義的な空間である。

町を奔走しながらも自身の像を相対化する「ぼく」には、「全域的空間」を把握する経験が含まれているし、俯瞰的な地図を作成しながらも、そこに自身

の価値観に基づく情報を書き込む様子には、「局所的空間」を把握する経験を含む。こうした意味で「ぼく」にとつての地図は、両義的である。

物理の法則とは、作用・反作用の比喩であることは先に述べた通りだが、「犬」としての奔走によって生じた罰が「作用」として、「神」の「地図」に「×」として書き加えられ、それが次の奔走に「作用」として、小さな暴力あるいはいたずら電話という「罰」として実行される。その「反作用」は、己の卑小な自己認識として現れ、それが紺野との会話や日々の奔走あるいは「世間」によって増幅され「地図」に「×」を加えてゆく。

ぼく自身ですらぼくの手の中であつた。ぼくはときどき英文解釈をこころみたり単純な代数の計算をやっているぼく自身が滑稽に思えるときがあり、うじ虫野郎と自分のことを悪罵するのだった。そんなことをやってなんになるというのだ、にんがしは齋藤や紺野にまかせておけばよい、この世界の敗残者であろうと勝利者であろうとそいつらはひとつ穴のむじんだ、どちらも大甘の甘、善人づらにこけがはえるてあいだ。予備校へ通つてどうしようというのだ。

齋藤や紺野ですらある意味自分の「影」である。そして、この循環は、「物理の法則」のように、認識する「ぼく」自身をも巻き込んでその現象の一部にしてしまう。「ぼく」の「地図」とは、主観客観の排中律を曖昧な状態に宙づりにするだけではなく、「抽象世界」と「現実世界」、寮あるいは部屋の「内部」と「外部」、「支配」と「被支配」などテキスト内の二項対立のほとんど全てを無効なものにしている。記号が差異の体系であるのならば、差異の消失する世界において「言語」によるアイデンティティの構築は頓挫するしかないが、もちろんテキスト内の全ての人間はそのことに無自覚である。

犬がまたまた尻尾をふりながらぼくに近づいてきた。ぼくは腰をかがめ口笛をふいてよんだ。ああ救けてください、ああ、このぼくがすべりおちるのをくいとめてください、ぼくは紺野の言葉をおもいだし、犬がいくら呼んでも一メートルほど手前で尻尾をふったまま近づかないので口笛をふく

のをあきらめた。そして、それはまったく発作的だった。(403頁)

「犬」「紺野」「マリア」「ぼく」あらゆるものが、相同であり相反でもある世界。それでも、「ぼく」は自己を探して「言葉」の「闘争」を続ける。

「だから、おれは、おまえみたいなやつがこの世にいることが気持わるくって耐えられない、腹だたしくってしょうがない、嘘をつきやがって」
 ぼくが言葉を吐きちらすように言うと、不意に受話器のむこう側で風がふきはじめたような音がひびき、糸のような、つまり触るとぼろぼろこぼれてしまいそうなこまかい硝子細工でできたような声がし、「死ねないのよお」と言った。(中略) ぼくはその声をきき、なにかが計算ちがいで失敗したと思った。「ゆるしてくれえないのよお、死ねないのよお」女がなおも細いうめくような泣き声で言い、ぼくはその言葉にではなくて声に腹を立て、「嘘をつけ」と吠えつくようになった。「嘘をつけ」たしかに確実にぼくは嘘だと思った。そう思わないととりかえしのつかないことをしてしまったようだがまんならなくなってしまうと思った。「ああ、ゆるしてよお」ぼくは乱暴に電話を切った。(411頁)

「おおはやし」が突然マリアに変わった瞬間、「ぼく」の勝利は無くなってしまふ。その「反作用」で「高山」や「白井」に電話をし、一方的に話すことではなく主導権を握ろうとするが、精神の安定は得られない。

ところで、物語に再三登場する四面ガラス張りの電話ボックスは昭和四四(一九六九)年から設置されたものである。昭和五九(一九八四)年の九三万台がピークであったことと、昭和四三(一九六八)年に市外通話可能な大型青電話の設置が開始、昭和四八(一九七三)年にはさらに小型化し百円硬貨が使用できる黄色電話の設置が開始されたことから、初出時(七六年)にはこの物語を可能にする条件が整っていたと言える。また、電話番号という個人情報我当时非常にゆるく管理されていたこと、電話が家庭と社会を接続するメディアとして機能していたことなども、この物語には欠かせない時代性である。¹⁵⁾

電話ボックスに自分の姿が映るとい情景は、現在から見れば、昭和の歌謡

曲の歌詞の定番となる位に使い古された情景ではあるが、この物語では、電話の後に映る自己の姿が自己卑下に繋がるきっかけとして機能している。

ぼくはジャンパアの左ポケットに入れていた煙草をとりだし、火をつけ、吸った。ぼくの顔がゆらめく炎にかびあがり、炎が消えるといつもの青ざめたいやらしい顔に戻って電話ボックスの硝子に映った。その硝子に額をくつつけて、ぼくは外をみた。そうだ、あしたは日曜日だ。なんとなく外はあつたかくつて、うれしそうだった。しかしながらここはちがう、このぼくはちがう。(412頁)

ここでは、テキストの当初から強調されていた「寒さ」が、「ぼく」にだけ集中的に流れ込んでいる。「ぼく」は再び電話を手取る。

「なんとか思いとどまっていた方法はないのですか、なぜあなたがそんなことを考えているのか、わたしたちは全然わからないんですよ、いったい目的はなんなのか? たとえばねえ、目的が金だというのでしたら、わたしたちだって、それはそれなりに理解できますが」(413頁)

東京駅への三度目の電話では、反抗の動機についてきかれその論理をうまく説明できなくなっている。

「どうして玄海号なんですか」
 「なんでもいいんだよ、だけど玄海になったんだ、しょうがないじゃないか、任意の一点だよ、いいか、おれがノートにためらめに点々をつくるだろ、一線と他の線が交錯する部分、それを一つでも二つでも白いノートにつくったことといっしょだよ、その点をけしごむですんだ、それがわからなきゃけしごむのかすでもなめてろ」(413頁)

「任意の一点」「一線と他の線が交錯する」といった受験物理や数学の言葉では全く相手を「支配」出来ない。物理のノートは物理の法則の世界だが、現実

の言葉は全く違う論理で動いている。これを超越するには、自らが会話を断ち切るしかないのだが、「ぼく」は相手の言葉の世界に飲み込まれてしまっている。

体が寒気のためにかすかにふるえていた。外は風がでてきたらしく、車道のむこう側のアイディア商品を売る店の看板がゆれていた。ぼくは体の中がからっぽになってしまった感じだった。(414頁)

言葉に敗北した身体は「寒気」の中の「からっぽ」という空洞として認識される。そこに、マリアの言葉が響き渡る。

これが人生ってやつだ、とぼくは思った。氷のつぶのような涙がころがるように出てき、ぼくはそれを指でぬぐった。ぼくはそんな自分の仕種が紺野のまねをしているように思えて、むりにグスツと鼻で笑った。(414頁)

紺野と同一化する「ぼく」。影との一体化。マリアの言葉は両者を媒介する声として響く。そこに残ったのは、空洞の身体のみである。

不意に、ぼくの体の中心部にあった固く結晶したなにかがとけてしまったように、眼の奥からさらさらしたあたたかい涙がながれだした。ぼくはとめどなく流れだすぬくもった涙に恍惚となりながら、立っていた。なんどもなんども死んだあけど生きてるのよお、声がからんとした体の中でひびきあっているのを感じた。眼からあふれている涙が、体の中いっぱいにたまればよいと思いつつ、電話ボックスのそばの歩道で、ぼくは白痴の新聞配達になってただつ立って、声を出さずに泣いているのだった。

言葉を失った空洞の身体は、ただ泣き崩れる。言葉を捨て他者と一体化する恍惚の代償は、輪郭を失った個である。はたしてこの涙は、救いなのか。「言葉」の「闘争」を続けることでしかアイデンティティを保てないのだとした

ら、個とは永遠の壁としかなり得ないのか。中上の物語はこうした地点から始まった。

註

テキストは、『中上健次全集』一卷(平成七(一九九五)年八月・創美社)より引用。引用の末尾のページ数もそれに由来する。

(1) 同時代表では文体等の魅力に触れながらおおむね好評価であるが、『季刊芸術』(一九七四年一〇月)の無署名評のように、設定や描写の稚拙さを指摘しているものもある。だが、いずれも今後の可能性についてふれることで、作家の成長物語として回収してしまっている。

(2) 山田夏樹「世間」と電子メディア―過渡期としての中上健次「十九歳の地図」(『立教大学日本文学』第九四号、二〇〇五(平成一七)年七月)では、電子メディアという記号と自由にうまく戯れることが出来ない「ぼく」が自己を失う物語であると読解している。

(3) 刈谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ』一九九五(平成七)年六月 中公新書

(4) 読売英英奨学生制度の一期生は一九六五年、日本経済新聞育英奨学会は一九六八年の発足、同年には毎日奨学生制度もスタートしている。

(5) 「新聞奨学生 SOS ネットワーク活動ブログ」<http://syogakusei110.blog32.fc2.com/> (HPのデータは、二〇一七年八月二三日確認、以下も同様。)

(6) データは、<http://www.garbagenews.net/archives/2014387.html>を参照。

(7) 註(1)での無署名評では「ぼく」の行動を「ありふれている」ものとしている。

(8) 猪野健治『ゼンガクレン』一九六八(昭和四三)年六月 双葉社

(9) 八〇年代に確立した消費主体としての学生文化の中心にサークル活動に代表される男女交際があったことや、八〇年代記号文化の中でブランド信仰やクリスマスマスの過剰な消費行動といった問題の背景にも「性」のあり方の変容があったことは、本テキストでは論証し切れないものの、こうした過渡期の問題を考える上でおそらく重要であろうと思われる。

(10) 東京博多間の運行は一九五三(昭和二八)年。

- (11) 渡邊英理「劇場から路地へ 中上健次『十九歳の地図』『熊野集』」(『ユリイカ』二〇〇八(平成二〇)年一〇月)では、テキストから同時代的な濃厚なテロルの匂い
に、ある種の政治的ラディカリズムに湧いた空気を読み取っている
- (12) 若林幹夫『地図の想像力』一九九五(平成七)年六月 講談社メチエ
- (13) 浅田彰「中上健次を再導入する」『批評空間』第12号 一九九四(平成六)年一月
- (14) 渡邊大輔「地図のように仮面のように」『路地』のエコロジ／エソロジ』『ユリイカ』二〇〇八(平成二〇)年一〇月
- (15) 金丸清彦『公衆電話ものがたり』一九八五(昭和六〇)年三月